

日本における中医学の現状（講演原稿）

日本中医学会会長 平馬直樹

日本の伝統医学は中国を起源として、中医学と同根です。8世紀頃から中国の医学を熱心に受容しました。17世紀前半の医学は中国の明医学を忠実に移入したものでした。

ところが、17世紀前半に江戸幕府は西欧列強の侵略を警戒し、鎖国政策により海外交渉を断ったため、人を介する医学交流はきわめて困難となり、書籍の輸入のみによって中医学を学習するようになりました。

中世社会では、日本の思想界を支配していたのは仏教の思惟でしたが、近世社会では思考の基準が仏教から儒学に転換しました。儒学は教育や学術の世界に広く浸透して、医学も儒学の動向に大きな影響を受けました。

18世紀には、宋学の理気二元論に懐疑が生じ、朱子の解釈によって儒学を学ぶのではなく、孔子の原典に立ち返って儒学研究を行おうとする復古主義が主流となりました。この日本の儒学の新潮流を「古学」と呼びます。儒者の伊藤仁齋、荻生徂徠らによって復古運動が展開されましたが、伊藤仁齋の古義学、荻生徂徠の古文辞学など、新しい儒学経典の解釈方法が生まれました。この運動は医学の古典文献研究にも大きな影響を与えました。

18世紀には中国の傷寒論研究の影響を受け、日本でも張仲景書と仲景方の研究と臨床応用が活発となりました。中医学の基礎となる陰陽学説、五行学説、運氣論などに懐疑が生じ、これらを弁証の拠り所とはせずに、臨床症候と仲景方を結びつける「方証相對」の治療が行われるようになります。

傷寒論を重んじるこの復古的医学の学派は「古方派」と呼ばれます。古方派はあらゆる疾患に仲景方の応用を試みました。治療効果は理論の整合性によるのではなく、実際の臨床効果を唯一の判定基準にすべきと考え「親試実験」を主張します。後藤艮山の「一氣留滯説」、吉益東洞の「万病一毒説」等、新しい病理理論が提案されました。ことに吉益東洞は大きな影響を遺しました。

鎖国政策が終了した開国後は、西洋医学のみを正規の医学とする国策により、伝統医学が衰退し、中国との医学交流はわずかな復活に留まりました。

20世紀になり伝統医学が復興しますが、湯本求真の『皇漢医学』の影響が大きく、方証相對により仲景方を用いる「古方派」が主流となったため、中国との医学交流は活発となりませんでした。しかし、大陸の中医学と交流を図ろう

とする、少数の人々が存在しました。

なかでも矢数道明先生は、1938年に東亜医学協会を設立し、東アジアの伝統医学の交流に努力しました。南京の葉橘泉先生、長春の張継有先生、北京の楊医亜先生とは古くから文通により交流を続けました。日中国交回復後には何度も中国を訪問し、多数の老中医と親交を深めました。在日中国人中医師への援助も惜しみませんでした。矢数道明先生は、日中医学交流の精神的支柱でした。

1970年代の日中国交回復後、伝統医学分野でも人の交流が復活しました。中国への留学も始まりました。

80年代になり焦樹徳（北京）・張鏡人（上海）・鄧鉄濤（広州）・陸完甫（成都）・柯雪帆（上海）らの老中医が訪日し、講演と臨床指導を行いました。この方々は現代の日本の中医学の恩人です。

また、1975年に発足した国際東洋医学会は、日本、台湾、韓国の医学交流を大いに促進しました。

1980年に東洋学術出版社が設立され、『中医臨床』誌（季刊）が創刊され、中医学の学習、研究が盛んになりました。同社は現代中国の多くの中医学書を次々と翻訳出版しています。

神戸中医学研究会、広島中医学研究会、東京臨床中医学研究会など各地で中医学の研究団体が設立され、日中医学交流の受け皿となりました。また、日本に留学する中国人の中医師が中医学の啓蒙活動に貢献しました。

従来近代日本で行われていた漢方療法や針灸治療とは、使用する薬物や器具に共通するものも多く、日本で中医学の治療を行うことは、それほど困難ではありません。従来日本で流通することのなかった生薬も少しずつ輸入が可能になり、使用が認可されるようになりました。

1989年の天安門事件以降、日中の医学交流は量的には停滞しましたが、各地の中医学研究会と在日中医師の努力により交流は質的に深まりました。弁証論治による治療を行う医師が徐々に増えています。しかし、日中医学交流を担う全国的組織が欠如し、継続的な交流が困難な状況が続きました。

2010年に至り、ようやく日本の中医学研究の専門機関となる、全国的な学術組織「日本中医学会」が設立されました。当学会は、中医学とこれに関連する領域の研究を促進し、国内外の知識と技術の交流を深め、日本と世界での中医学の発展と普及を目指す学術団体で、中国、台湾、韓国、欧米など海外の医学界との交流を担います。

昨年設立シンポジウムの開催に続き、本年9月3、4日には第1回学術総会を東京で開催します。総合テーマは「中医学の臨床への応用と科学的検証」。

スライドに示すシンポジウムを企画しています。国内外の多数の中医学者の参加を歓迎いたします。

今回、陳志芳先生の招待により、私たち日本中医学会と台湾の国医の皆様との交流を深めることができ、心から感謝申し上げます。ご静聴ありがとうございました。